様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２９６０

研究課題名（和文）中世ユダヤ教文学におけるキリスト教世界への対抗的言説の複合的研究

研究課題名（英文）Multiple Studies on Counter-Narrative Discourses against the Christian World in the Medieval Jewish Literature

研究代表者
志田　雅宏（Shida, Masahiro）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・講師

研究者番号：１０８３６２６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は西洋中世キリスト教世界のさまざまなユダヤ教文学の分析を通じて、ユダヤ人とキリスト教徒の関係を考察するものである。本研究の特色は、その関係性をユダヤ人たちの視点からとらえようとする点にある。具体的な成果として、ユダヤ人たちによって書かれた宗教論争文学や聖書解釈、民間伝承、神秘主義的文献などによって構築される言説において、キリスト教やキリスト教徒がどのように描かれているのかを明らかにすることができた。また、宗教史の観点から、このような中世の宗教文化が現代のユダヤ教においてどのように受容され、解釈されているのかを考察するための視点を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的意義は、中世ユダヤ教研究やユダヤ人の視点に立った西洋中世史研究など、国内の人文学においてかならずしも十分な蓄積がない分野の研究を進めたことである。また、その対象となる時代を中世に限定せず、中世に立脚しながら現代の宗教的な世界をとらえるための視座を提供しようとする点にも大きな意義がある。
　また、社会的意義は、迫害史観をはじめとするイメージでとらえられがちなユダヤ人とキリスト教徒の歴史的な関係性を問いなおし、ユダヤ人たちがキリスト教徒の社会や文化に対抗しつつ共生していたという多様な側面を示したことである。

研究成果の概要（英文）：This research is to consider relations between Jews and Christians through analyzing various Jewish sources in the medieval Western Christian world. A specific feature of this research is to view this relationship from the viewpoint of the Jews. As an important achievement, this research has clarified how Chrisitanity and the Christians were described and depicted on the discourse constructed by varjous Jewish sources including the polemical literature, biblical exegesis, popular folktales, mystical texts and so on. And as another achievement, it offers a viewpoint for considering modern Jewish world and its reception of the traditional medieval religious culture from a perspective of the history of religion.

研究分野：宗教学

キーワード：ユダヤ教　中世　キリスト教　比較宗教　宗教史　宗教論争　民間伝承

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）報告者は博士論文（２０１７年東京大学提出）にて、中世イベリア半島のユダヤ人学者ナフマニデスについて研究した。ナフマニデスはアラゴン連合王国のユダヤ人指導者として、キリスト教徒の修道士たちと宗教論争に従事した。また、彼は聖書の解釈を通じて、キリスト教世界の暴力性を批判する主張を展開した。報告者は博士論文におけるナフマニデスの研究を通じて、西欧キリスト教世界のなかで生活し、キリスト教文化と向きあうユダヤ人たちが創出するユダヤ教文化について包括的に研究するという着想を得ることができた。ナフマニデスだけでなく、西欧各地のさまざまな人物や事例を取り上げることで、彼らのユダヤ教文化の多様なあり方を描き出すことを実現すべく、本研究を開始した。

（２）本研究にあたって報告者がまず念頭に置いたことは、中世西欧のキリスト教世界のユダヤ史における重要な論点を確認し、整理することであった。この研究分野の重要性は、１９世紀にドイツで成立した近代ユダヤ研究のなかで早くから認識されていた。その後、研究の対象となる中世のヘブライ語およびその他の言語の写本を収集と校訂が本格化するとともに、ユダヤ史における一分野をなす「中世史」として、地域ごとの詳細な歴史研究が進んだ。１９９０年代にはこれらの研究を総括する総論も構想されるようになり、なかでもイスラエルの歴史学者たちによる『西欧のユダヤ人とキリスト教徒』叢書（１９９３－９８年、ヘブライ語）は決定的に重要な成果といえる。その理由は、「キリスト教徒たちに迫害されるユダヤ人」という迫害史観を批判的に刷新したことと、「単一の普遍的なユダヤ性」なるものに還元されない中世ユダヤ教の多様さを描いたことである。報告者はこのようにして先行研究を整理することで、これらの二つの論点を具体化した近年の諸研究の潮流に本研究を位置づけることを構想した。

（３）続いて、本研究において検討するユダヤ教とキリスト教の関係性について、報告者は以下の視点を導入した。それは、キリスト教徒とユダヤ人の「関係」や「影響」、より具体的には「接触」に注目するという視点である。キリスト教徒たちがマジョリティを構成する社会において共同体を形成したユダヤ人たちは、当然のことながらこの異教徒の隣人たちとの交流を通じて生活していた。そのなかでのユダヤ人たちの宗教的実践は、キリスト教世界への対抗性を有するものとなっていった。その対抗性は、宗教的マイノリティとして生活するユダヤ人たちのアイデンティティの創出と維持にとって不可欠な特徴であった。しかし、「対抗」とはキリスト教徒の社会や文化との「断絶」を意味するのではない。むしろ、彼らとの「接触」によって生み出されたものであったのである。この視点は主に、報告者のイスラエル留学（ヘブライ大学、２０１１年－１３年）時に指導を受けた研究者のひとりであるＲ・ベン・シャローム氏の研究や授業（演習）から得たものである。そして、報告者は本研究において、この視点からさまざまな具体的事例を検討し、この対抗的な言説を検討することをめざした。

２．研究の目的

本研究は、上述のユダヤ人たちのアイデンティティを構成する主要な要素として「宗教」に注目する。その目的は以下の三点である。

（１）本研究は原則として文献研究であり、さまざまな種類のユダヤ教文学の文献についての分析と考察をおこなうものである。その目的は、宗教的なアイデンティティが宗教的な文献と密接な関係にあることを、中世西欧のユダヤ教を事例として論じることである。そして、この目的を達成するための視座として重要なことは、文献の「成立」のみならず、その「受容」にも注目することである。各文献が書かれた文脈（いつ、どこで、誰によって、なぜ書かれたのか）を知ることはもちろん重要だが、それだけではなく、それがどのように伝播し、読まれたのかをたどることも等しく重要である。具体的には、写本調査や後代の著作における引用の調査によって、ある文献がどのような人々に読まれたのか、そしてそこにどのような創造的読みが働いたのかを明らかにすることである。このように文献の「成立」と「受容」の双方を検討することで、これらの文献が人々の宗教的なアイデンティティの形成にとってどのような役割をはたしたのかを明らかにすることが可能となる。

（２）本研究は中世西欧およびユダヤ教という特定の時代や地域、宗教を対象とする研究であるが、宗教史や宗教概念研究への学術的な貢献や提言がその目的に含まれる。現代の「宗教」という概念は、近代西欧のキリスト教をモデルとして成立したものであり、近代西欧のユダヤ教も同様にこの「宗教」概念の影響を強く受けている。それは、近代西欧という同じ時代および地域の異なる宗教者のあいだで、類似した「宗教」概念が共有されていたことを意味する。では、同様のことが中世西欧にも言えるであろうか。つまり、中世西欧においても、ユダヤ人とキリスト教徒は共通する宗教観を持っていたと言えるのか。それは、異なる宗教伝統を生きる宗教者たちが、対話的関係の基盤となりうる宗教理解を共有しえたかどうかを問うものであり、同様のテーマを扱う他の宗教についての研究にとって、本研究が示唆的な議論を提示することが期待される。

（３）最後に、本研究は中世という歴史的な視点から、現代における諸宗教の関係の構築や宗教間対話への提言を試みるという目的を持つ。本研究の対象地域のひとつである中世イベリア半

島では、ユダヤ人とキリスト教徒による宗教論争が繰り返されたが、それは「対話」という場の重要性を双方が認識していたからこそ実現したものであった。宗教的な主題についての論争は、宗教的マイノリティの声を封殺することではなく、それに耳を傾けることによって成立した現象である。現代の宗教間対話と中世の宗教論争は、その目的も文脈も大きく異なるが、宗教的な他者についての理解を自分たちの宗教的アイデンティティの構築に生かすという作法には緩やかな共通性もみてとれる。そして、そこに中世宗教研究の持つ現代的な意義があり、本研究が現代における諸宗教の関係についての理解に資する点があるといえよう。

３．研究の方法

本研究の方法は、中世後期の西欧におけるさまざまなユダヤ教文学を分析・検討することである。具体的には、以下の三つのテーマを挙げて、研究を進めた。なお、扱う文献については、すでに校訂版として出版されているものと、イスラエル国立図書館などが所蔵する写本（オンラインで使用可能なデータベースあり）を使用した。

（1）聖書の真理をめぐる論争

中世西欧のユダヤ教文学において、１２世紀に新しいジャンルの文学が成立した。それは、キリスト教徒との論争を主題とする「論争文学」である。ユダヤ教とキリスト教はヘブライ語聖書／旧約聖書という教典を共有しており、古代末期のキリスト教の教父たちはユダヤ人を論敵として想定し、イエス・キリストの到来とメシア的達成を旧約聖書の解釈によって示す論法を確立した。さらに、１２世紀になると、カトリックの教義についての合理的証明やラビ・ユダヤ教の文学についての学習が進んだことにより、対ユダヤ教の論争が拡大した。それに対し、ユダヤ教世界ではこれらの論争に応答する仕方で、ユダヤ人の知識人たちがキリスト教を論駁したり、ラビ・ユダヤ教の聖書解釈の伝統を擁護したりする著作を書くようになった。本研究では具体的に１２世紀の南フランスにおけるふたつのキリスト教論駁書と、１５世紀のスペインにおけるユダヤ教弁論を取り上げて、その理路や意図を明らかにした。

（2）ユダヤ教世界におけるイエス伝承

中世のユダヤ教世界では、福音書に描かれたイエス・キリストを「不遜な魔術師」として語りなおす民間伝承が広まった。このユダヤ人たちの語るイエスのアナザー・ストーリーは後に『トルドート・イェシュ』と呼ばれ、キリスト教を異端視する古代末期のラビたちのイエス批判と、イスカリオテのユダをダークヒーローとして登場させる文学的な虚構や娯楽性を併せ持つ物語として広まった。本研究では『トルドート・イェシュ』の持つ特徴を「対抗物語」としてとらえ、物語の細部にみられるモチーフや、ユダヤ人社会およびキリスト教徒の社会における受容に注目し、考察した。

（3）共同体における記憶と記念

中世西欧において、ユダヤ人たちはしばしばキリスト教徒たちの迫害的な社会に直面した。１０９６年のドイツ・ライン地方の各都市において、第一回十字軍から派生して生じたユダヤ人への迫害は、その最も深刻な事例のひとつである。この迫害について、ユダヤ人たちの死を「殉教」として記したヘブライ語の年代記が書かれた。本研究ではこれらの年代記を分析し、中世のユダヤ人共同体が体験した迫害や暴力がどのように記憶され、意味づけられていったのかを考察した。また、１４９２年にスペインのユダヤ人たちは国外への追放を体験したが、１６世紀のユダヤ人によるいくつかの歴史書には、この出来事に関連した「聖人伝」が記された。本研究では、追放を体験した世代のユダヤ人たちが語る奇跡譚の分析を通じて、彼らが自分たちの過去と現在をどのように結びつけたのかを明らかにした。

４．研究成果

（１）国内における位置づけとインパクト：本研究のテーマは、国内ではこれまでほとんど研究がおこなわれてこなかった分野にかんするものであり、新規性が高い。また、宗教学やユダヤ研究だけでなく、哲学や西洋史などの場でも研究発表をおこなったことにより、研究を通じての隣接分野との交流を進めることができた。この新規性と対話性を、本研究の国内におけるインパクトとして挙げることができる。

国外における位置づけとインパクト：本研究において得られた成果の一部については、中世ユダヤ教研究の蓄積が厚いヨーロッパやイスラエルのユダヤ研究の場においても研究発表をおこなった。とりわけ、上記の３．の（１）にはこれらの国外の研究でもほぼ未着手のものが含まれており、本研究を通じて国外においても一定の学術的貢献をはたすことができた。

（２）研究計画の段階で予想していなかった研究成果として、中世を対象とする本研究を現代のユダヤ教文化についての考察と接続することができた点が挙げられる。中世から現代を眺望する視座を得られたことは、ユダヤ教の歴史についての宗教史的検討を発展させる契機となりうる。また、この視座を古代末期にも広げ、ユダヤ教の歴史のダイナミズムを描き出すことも求められよう。

（３）中世ユダヤ教研究の観点から見たときの将来的な展望は、本研究をふまえたうえで、より多様な種類の文献資料を扱うことにより、中世のユダヤ人たちの日常的な宗教実践における敬

虔さの表現を明らかにすることである。宗教論争のような知的活動や、民間伝承および年代記のような語りの活動には必ずしも現れてこない日常的な敬虔さの実践を研究の射程に含めることで、中世西欧のキリスト教世界に生きるユダヤ人たちの文化や心性をより多面的に描き出していくことが可能となるであろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 志田雅宏	４．巻 14
２．論文標題 中世西欧のユダヤ教における対キリスト教論争文学の嚆矢：ヨセフ・キムヒ『契約の書』とヤアコヴ・ベン・ルーベン『主の戦い』	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋中世研究	６．最初と最後の頁 7-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 志田雅宏	４．巻 38
２．論文標題 ユダヤ教世界のイエス伝：ストラスブール写本版『トルドート・イェシュ』とその文脈についての研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東京大学宗教学年報	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002000914	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 志田雅宏	４．巻 12
２．論文標題 聖書解釈の広がりと深み：中世キリスト教文化との対話のなかで	５．発行年 2021年
３．雑誌名 京都ユダヤ思想	６．最初と最後の頁 44-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 志田雅宏	４．巻 95（別冊）
２．論文標題 【報告要旨】ヨセフ・キムヒ『契約の書』：宗教論争とユダヤ教聖書解釈	５．発行年 2022年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 160-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 志田雅宏	4．巻 37
2．論文標題 【研究ノート】アブラハム・アブラフィアにおける真珠のたとえ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 東京大学宗教学年報	6．最初と最後の頁 57ー71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079458	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ー

1．著者名 志田雅宏	4．巻 93
2．論文標題 中世ユダヤ教民間伝承におけるキリスト教世界への対抗物語：改宗を語ることをめぐって	5．発行年 2019年
3．雑誌名 宗教研究	6．最初と最後の頁 75-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ー

1．著者名 志田雅宏	4．巻 93（別冊）
2．論文標題 【報告要旨】ヘブライ語年代記における十字軍の迫害とユダヤ人の殉教	5．発行年 2019年
3．雑誌名 宗教研究	6．最初と最後の頁 206-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ー

1．著者名 志田雅宏	4．巻 96（別冊）
2．論文標題 【報告要旨】ソロヴェイチク『ハラハー的人間』：現代ユダヤ教の哲学的探究	5．発行年 2023年
3．雑誌名 宗教研究	6．最初と最後の頁 128-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ー

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　8件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 中東に残るユダヤ教
３．学会等名 アラブ調査室（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 Ibn Gabirol and Nahmanides: A Transmission of Andalusian Tradition (Commentary Lecture)
３．学会等名 同志社大学一神教学際研究センターワークショップ（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 Hayyim ibn Musa’s Shield and Spear: A Late Medieval Intellectual Polemic and Its Context
３．学会等名 The 18th World Congress of Jewish Studies（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 ソロヴェイチク『ハラハー的人間』：現代ユダヤ教の哲学的探究
３．学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 ヨセフ・キムヒ『契約の書』：宗教論争とユダヤ教聖書解釈
３．学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 カイロ・ゲニザ文書と中世地中海世界のユダヤ教文化
３．学会等名 日本ゲニザ学会「ゲニザ入門講義」（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 聖書解釈の広がりと深み ：中世キリスト教文化との対話のなかで
３．学会等名 京都ユダヤ思想学会第13回学術大会（公開シンポジウム）（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 ユダヤ教における聖地の「地図」
３．学会等名 CISMORリサーチフェロー研究会 第2回「シオン／エルサレム／聖地」観の再検討：聖書テキストから今日に至るまで（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 神の名前の使い手：中世ユダヤ教民間伝承におけるキリスト教世界への対抗物語
３．学会等名 西洋中世学会第11回大会シンポジウム「中世のユダヤ人ー時空の彼方にー」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 ヘブライ語年代記における第一回十字軍の迫害とユダヤ人の殉教
３．学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 志田雅宏
２．発表標題 ナフマニデスのアリヤー：思想・戒律・現実
３．学会等名 CISMORワークショップ第1回「シオン／エルサレム／聖地」観の再検討：聖書テキストから今日に至るまで」（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留（編）（分担執筆：志田雅宏）	４．発行年 2020年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 274
３．書名 世界哲学史4	

１．著者名 上智大学キリスト教文化研究所（編）（志田雅宏：分担執筆）	４．発行年 2019年
２．出版社 リトン	５．総ページ数 206
３．書名 ユダヤ教とキリスト教	

１．著者名 勝又悦子・志田雅宏・柴田大輔・高井啓介（編著）	４．発行年 2020年
２．出版社 リトン	５．総ページ数 423
３．書名 一神教世界の中のユダヤ教	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関